

建築設計の立場から 地域の再生に貢献する

黄金町という町

横浜港に注ぐ大岡川の川沿いに黄金町こがねちょうという町がある。昔は農村だったが、横浜開港とともに都会化した。だが、関東大震災と横浜大空襲で壊滅的打撃を受け、建物が取り壊され、多くの空き地が生まれた。戦後米軍が港湾施設を接収したとき、接収地域から多くの間屋業者がここに移住したといわれる。

隣接地域に職業安定所ができたことから、この地域には仕事を求めて集まった港湾労働者の簡易宿泊所がつくられた。その労働者たちに食事を提供し、酒を飲ませる小規模飲食店街が京浜急行の高架下に生まれ、それらの店の一部で非合法の風俗営業が行われるようになった。時代が移り、職業安定所が移転し、簡易宿泊所が撤去されてからも、表向きは飲食店に見せかけた非合法風俗店は一向に減らず、麻薬の密売さえ行うようになり、一般市民の近づきがたい特殊な地域に変貌していった。1998年、京浜急行は高架の橋げたの補強工事のために高架下の小規模飲食店に立ち退きを要求した。その結果、ほとんどの店は高架の周辺に移転したが、その後は、かえて数が増え250店に及んだ。「もうこんなところには住んでられない」と一部の住民が言い出したのが、地域住民が

立ち上がるきっかけとなった。もし土地が売られれば違法な店がさらに増えることになる。住民たちは警察と一緒に違法店舗排除の運動を展開した。2009年の開港150周年を前に町の浄化を目指していた横浜市も強力にバックアップし、2005年によく違法店舗一掃を実現した。問題はその後はどういう町づくりをするかだった。放置すればすぐ元に戻ってしまう。そうならないよう、普通の人に安心して来てもらえるような町をつくり上げる必要があった。

BankART 桜荘

建築家の曾我部昌史そがべまさしさんのもとに、黄金町のある店舗の改修の相談が寄せられたのは2006年のことである。町の再生のために横浜市が違法営業の店舗だった1軒を買い上げ、美術系NPO法人がそこにアーティストたちの活動拠点として「BankART 桜荘」を立ち上げることを提案。それが採択されて、NPO法人が神奈川大学教授に着任したばかりの曾我部さんに設計施工を依頼してきたのだ。

建物は大岡川沿いの道路に面している。こじんまりした建物だが、そこで違法な営業が行われていたとは信じがたいほど明るい。アー

ティストたちが創作活動に打ち込んだり談笑する様子が見えそうなほど窓が大きく開いており、誰でも入って行ける開放的な雰囲気がある。

曾我部さんは学生から有志を募り、彼らと一緒に施工まで引き受けて完成させた。何人もの学生が毎日通ってきてハンマーや電動ノコギリの音を立てて大工仕事に精を出した。学生たちはアルバイトではなかった。曾我部さんの話を聞いて「おもしろそう!」と自ら手弁当で参加し、本職の大工から手順を教わりながら、喜々としてわか大工の役割を引き受けたのである。素人集団だから本職の何倍もの時間がかかった。だがその時間の経過の中で、学生たちの無邪気さや明るさが、それまでの暗くよどんだ町の雰囲気に変化を与えた。「この町は変わるかもしれない」という希望を地元住民たちはいつしか確信するようになった。

曾我部さんと学生たちの仕事を注視していた横浜市役所は、次にもっと大きな相談を持ちかけてきた。橋げたの補強工事のために京浜急行の高架下はもう何年も鉄板で覆われていたが、工事が終わった2カ所だけその鉄板が取り払われていた。そこを市が借り受け、アーティストたちの拠点となる設備をつくらうという計画が持ち上がったのである。1カ所を曾我部さんの神奈川大学の研究室が、もう1カ所を横浜国立大学の建築学科の研究室が担当することになった。

黄金スタジオ

曾我部研究室が引き受けた300平方メートルは、いま「黄金スタジオ」と呼ばれる施設ができ上がっている。高架下に木造の枠組みがつくられ、一方が全面ガラス。もう一方にも大きな窓が取り付けられ、向こう側の景色が透けて見える。中は5つの個室に分か



曾我部昌史教授

れ、それぞれアーティストたちの創作活動の場に供される。5つの個室を結ぶ廊下を兼ねた広い土間があり、誰もがそこに入ってアーティストたちの仕事ぶりに触れたり会話することができ、スタジオの中央は喫茶兼レストランになっていて、音楽を聴きながらくつろげるスペースになっている。

そこで一杯のコーヒーを注文した。明るく、清潔で、開放的で、静かに流れる音楽がやさしい雰囲気をたたえ、天井の高さがゆったりとした余裕を感じさせていた。「このスタジオの構想を固めるのに市役所の担当者を交えて地域住民と何度も会合を持ちました」と神奈川大学の研究室で曾我部さんが言った。

どういう施設にするのか、どんな構造、どんな雰囲気のものにするのがよいか、さまざまな立場、さまざまな価値観からの住民たちの意見を聞き、それを突き合わせ、できる限りそれを活かす形で何度も何度も図面を描いて少しずつ詰めていって、最終的な図面を決定した。

黄金町バザール

曾我部さんの研究室による「黄金スタジ

オ」と横浜国立大学の研究室による「日の出スタジオ」が完成したのは2008年8月のことである。翌9月から12月にかけて、この地域が負のメージから脱却して、新しく生まれ変わったことをアピールするために「黄金町バザール」というイベントが開催された。地域住民を中心に、曾我部さんの研究室、横浜国立大学の研究室、NPO法人らによって編成された「黄金町バザール実行委員会」が主催し、横浜市役所がバックアップする形で、各地から集まったアーティストたちが「黄金スタジオ」や「日の出スタジオ」を中心に創作活動を展開したのである。

たとえば、バザールの期間中、地域の店の店主のポートレートを毎日油絵で描き、最後にそれをスタジオに集めて展覧会を開いた女流画家、スタジオ内に窯を設置して茶碗を焼き、その茶碗を使って地域の人たちと一緒に茶会を開いた陶芸家、ペーパークラフトの果物キットを通りがかりの人たちに販売し、それを組み立てて紙の果物を完成させた人に本物の果物と交換して、棚に並べた本物の果物がすべて紙の果物に替わるまで、折り紙キットを売り続けたタイ人のアーティスト……など。

黄金町バザールが終了したいま、2つのスタジオには新しいアーティストたちが入居を始め、それぞれの創作活動を開始している。暗黒のイメージで覆われていた町は、新たなアー

ティストの町として情報発信を始めている。

商店街再生計画

黄金町ほど極端ではないにしても、かつての活力を失った街並みが各地で増えている。とりわけ多いのは、過疎化の進む地域で、郊外の大規模店に地域の購買力を根こそぎ奪われ、シャッター通りと化した商店街である。商店街がにぎわいを失うことで、そこで繰り広げられた人と人とのつながりが希薄になり、それが地域の活力を失わせている。

そんな商店街を再生させるにはどうすればよいか。「BankART 桜荘」を手掛けたころから、曾我部研究室はそのテーマを追い続けている。

「建築というのは、単に箱をつくるということではありません。建物はモノによっては100年もそれ以上にも残る。その中で経済活動も行われるし、芸術活動も行われる。その他もろもろの人間の営みの舞台となる。近代建築は、住宅とか美術館とか図書館というふうには、あいまいな部分を削ぎ落として機能別に分けて考えてきた。しかし、人間の活動には削ぎ落とされ単純化された機能だけではとらえきれないものがいっぱいある。昔の建物は住むところもあれば、美術品も図書も武器も置いてあった。建築は人間のあらゆる営みの舞台



京浜急行の高架下



BankART 桜荘



黄金スタジオの外観

であり、社会全体のあり様と不可分に結びついている。だから、建築設計の立場から今の社会が抱える問題にどうかかわることができるか、我々の立場から提供できる解決ヒントはないかを追及していきたいのです」。

頭を柔らかくして可能性をさぐる

曾我部さんが考える商店街再生のひとつのヒントは、にぎわいを失った商店街と大学を結びつけたらどうかというものである。かつての大学は西洋のオーソライズされた知識体系を学生たちに教えればそれでよかった。が、世界の中の日本の立場が相対的に向上し、また、世の中の変化が激しくなったことで、そんな学問だけではとても用をなさなくなっており、大学自身が世の中と直接関わり、問題を見つけ、解決方法をさぐっていくことが期待されるようになった。

ところが、近年の大学の多くは都心を離れて郊外に移転し、世の中との関わりが薄くなっている。そこで過疎の町の商店街問題に大学が積極的にかかわったらどうだろうというのが、曾我部さんの着想である。

消費社会研究家の三浦展氏と曾我部研究室による著書「商店街再生計画」には大学とのコラボレーションによる商店街再生のさまざまなアイデアが集められている。たとえば、

- 大学の放送研究会が電気屋さんの店先のテレビモニターを借りて店先で講義が聞けるようにしたり、商店街や大学のニュースを流す。電気屋さんを基点に情報発信することで、地域の人たちも学生も集まってくる。
- 定休日の銭湯を大学の軽音楽部のライブ会場や美術部のデッサン教室として貸し出す。
- 空き店舗を借り受けて留学生が自国料理を出す店を開く。2階では留学生が講師となって語学教室を開いてもよい。

「商店街再生計画」は平成東京大学という架空の大学が、シャッター通りと化したある商店街にキャンパスを移転させるという漫画のような奇想天外な話として展開されているが、紹介されている事例は各地で実際に行われているものである。もちろんこれらが切り札になるとは限らないが、要は従来の枠組みの中だけで考えていても解決方法は見つからない。異質との組み合わせを探り、頭を柔らかくして発想の転換を図ることが大切だと曾我部さんは言う。

■曾我部 昌史氏

建築家。神奈川大学教授。建築設計事務所(株)みかんぐみ代表。住宅、保育園、ライブハウスなどの建築設計から家具、プロダクト、インスタレーションまで幅広くデザインを手がける。

■参考文献

「黄金町バザールガイドブック+読本」

(黄金町バザール実行委員会刊、2008)

「商店街再生計画」

(三浦展+神奈川大学曾我部昌史研究室著、洋泉社刊、2008)



黄金スタジオの内部



黄金スタジオで行われたシンポジウム



「商店街再生計画」の一画面